

雜 錄

日滿農家の生活比較

(攝待初郎氏の『農業植民悲觀説を駁す』の一節に就て意見を述べ、傍ら貨幣所得以外に看過すべからざる無形所得あることに言及す)

河 上 肇

南滿洲鐵道株式會社地方部地方課の編纂に成れる『産業資料』は、其九として、攝待初郎氏の『滿蒙農政私案』を收め、其卷末には同氏の『農業植民悲觀説を駁す』と題する七十餘頁の論文を附録してある。今茲に問題とするは、其論文の第二章日滿農家の生活比較と題する部分に就てである。

此章の目的とする所は、『日滿兩農の生活程度には甚しき懸隔ありて、日農は經濟的競争に堪へざるべく、滿農と並立すること困難なるべしとの説を駁す』に在りて、其大要は次に述ぶる

が如くである。

氏は先づ誤れる觀察と題して述べて曰く、『滿洲農家の生活は其程度甚だ低く、吾が日本農家の比にあらざるが故に、吾が農民を移住せしめ、彼等滿洲農民と並立せしむるも、到底經濟的競争に堪へざるべしとは、從來吾が滿洲旅行者、視察者の多くが唱へし所にして、有識者の之に和せしもの亦た尠しとせざるなり。余數年前渡滿當初の感も亦同一なりき。爾來各地方の旅行中親しく農家を歴訪し屢次大小の農家に宿泊し、考察し、油然として疑念の湧出するものあり。爾來常に仔細の研究を怠らざりしが、先年好機を得、鐵道沿線十數縣百餘箇村に亘りて、農村并に農家の經濟狀態を稍々詳細に亘り調査するに及び、從來の觀察の正鵠を得ざりしことを確認するに至れり。

『想ふに日滿農家の生活程度に於て爾く懸隔ありと誤解せしむる理由一二にして足らずと雖も、一たび滿洲に渡り、荒涼寂寞の農村部

落に入り、不潔と無趣味とに鎖されたる陋屋を望めば、故國の瀟灑たる農村と畫の如き田園とを顧みて、誰か其霄壤の差あるを感ぜざるものあらんや。況して支那と言はば動もすれば始めより劣等の人種として之を蔑視するの風ある邦人としては、滿洲一農民を見て非常の窮民視し生活程度頗る卑きものなりと速斷するは敢て無理なきに似たりと雖も、蓋し是れ皮相の觀察と謂はざる可らず。……茲に於て成るべく確的の材料に基づき、穩健なる對照を試み、公平なる判斷を下し、以て本章の目的を達せんと欲す。云々」

かくて氏は「日本に於ける小農と滿洲に於ける小農とを比較し、日本中農と滿洲中農とを對照」するが爲め、先づ「右各規模の農家の生活に要する經費年額を調査し、一家の老幼男女を平均して、一人當り一箇年の生活費を算出對照し、次の如き結果を出された。

『生活費一人當年額は、日本の滿洲より多く

要すること、小農に於て七圓四四二、中農に於て一五圓三一一に及ぶ。換言すれば、日本の農家は滿洲の農家よりも、夫れ丈け多くの生活費を要しつゝあり。』
乍併、多くの生活費を要すと云ふことは、必ずしもより豊富なる生活の實質を有すと云ふことを意味しない。即ち氏は

『然りと雖も、是に依りて滿洲の農家は果して日本の農家よりも生活の程度高きものと斷定するを得べきや否や、余は直ちに之に首肯することを得ず。即ち夫等生活費の内容を分解し順次敘述する所に由りて讀者の判斷を乞はんとす。』

といふ趣旨の下に、(一)食料費、(二)服裝費、(三)薪炭油費、(四)教育費、(五)雜費の五項に分ち、日滿農家の生活の實質内容に就き詳細なる比較をして居られる。今其一例として彼等の生活上最も重要な地位を占むる主食物の費用及び實質の比較を見るに即ち左の如し。

中農主食物(一年一人當)比較

種類	用 量	價格(一石に付)	出費總額
日 白 米	0.5石	19.000	10.000
本 精 麥	0.25石	8.000	2.000
計			12.000
滿 精 蜀黍	1.8石	4.500	8.100
精 粟	0.8石	5.500	4.400
計			12.500

『即ち日滿主食物年費の差は五圓五一六となる。然るに日滿其位置を換へ、日農の主食物を滿洲に於て、又は滿農の主食物を日本に於て採るものとせば如何。』氏の計算に依らば左の如し。

日農の主食物を滿洲に於て採る場合

白米(朝鮮産)	0.5石	(石) 12.000	奉天相場	8.000
精麥(滿洲産)	0.25石	(石) 6.000	奉天相場	1.500
計				9.500

滿農の主食物を日本に於て採る場合

蜀黍	1.8石	(石) 12.000	東京相場	21.600
粟	0.8石	(石) 11.000	東京相場	8.800
計				30.400

是に由りて觀れば、日農の米麥食を滿洲に於

て採る時は、日本に於けるよりも四圓餘廉價に、又滿農の雜穀食に比すれば僅に一圓三十錢餘高價なるに止まり、而して滿農の雜穀食を日本に於て採る時は、滿洲に於けるよりも十五圓餘高く又日本の米麥食に比するも九圓七十六錢餘の高價となる。『故に滿洲に於ける滿農の雜穀食は日本に於ける日農の米麥食よりも、實價多くして且つ高價なること』を知るに足る。

氏は食料以外更に服裝費、薪炭費、教育費、雜費の諸項に就き、以上と同様の比較研究を爲し、其結論として次の如く述べられて居る。

『余は日本の中農(田地一町大半裏作)と滿洲の中農(畑地六一〇町全部一毛作)の一箇年一人當生活費を對照して

日本中農	三七.九三三	差額	一五.三一一
滿洲中農	二二.六二二		

其差十五圓餘に及ぶに拘らず、夫等生活費の内容を解剖し、滿農の生活需用品を日本に求むるものこそは、大凡そ四十四五圓を下らざる事を詳述せり。日農の生活費を超過すること六七圓に及ぶ。是に於て生活程度は滿農の寧ろ日農に優れるを證言し得へし。況んや滿洲は未だ現日本と異なり教育、衛生、醫藥等の如き文明的設備を缺きて殆んど

其費用を要せず、復た公租、公課并諸寄附（赤十字社、愛國婦人會、武徳會の如き）の負擔極めて渺なきに於て、や。蓋し日農生活費の高きは需用品の高價にあり、其の負擔の多きにあり、生活程度の高きにあらざるなり。世人の多くは日農の生活を觀るこゝ高きに失し、滿農の生活を觀るこゝ低きに失し、彼我著しく生活狀態を異にし風俗慣習の同しからざるよりして、皮相の見解を下し、或は之に雷同して真相を了解せざるもの比々熒然り。余の世説に反して滿農生活の日農生活に優るこゝ劣るこゝなきを茲に斷言して憚らざる所以なり。』

以上が攝待氏の議論の要領であるが、今余は氏の擧げられたる事實そのものに就ては、何等批評の資格なき者である。故に日滿農家の生活費及び其費用の意味する所の生活の内容實質に就ては、氏の擧げられたる事實を以て真相を得たるものと假定して置くが、只この同じ事實に對して如何なる解釋を下すかに就ては、多少議論の餘地が在ると信ずる。これ余が茲に問題とせんとする所である。

余の考ふる所に依れば、貨幣所得又は其貨幣

に依りて購買し得らるる所の所謂實質所得を標準として、人の生活程度を測定すると云ふ事は大體に於ては差支ないが、場合に依つては甚だ不正確なる結果を齎すものである。試に一例を大學教授の所得に採らんに、今日我國に於ける彼等の貨幣所得は比較的に僅少である。從て彼等が其貨幣に依りて購買し來る所の實物も比較的に僅少である。乍併彼等は此等の所得以外に猶大なる無形の所得を有することを看過してはならぬ。即ち大學には圖書館實驗室等の設備が相當に整つて居る。一個人の所得を以てしては到底購入することを得ざる多數の又は高價の圖書、機械、藥品の類が備はつて居て、彼等は自由之を利用することが出来る。此等の關係に於て、彼等は、月々支給さるる所の俸給以外に種々の大なる利益を支給されて居るのである。其が彼等の無形の所得である。故に假ひ他に大學よりも多額の月給を支給する所ありとするも、若し其所に何等研究の設備なく、從て大學にて得らるるが如き無形の利益を得られざるな

らば、彼等にして研究に志す限り、彼等は大學を去つて他に移ることを利益とせぬのである。

今日本の農家が滿洲に移る事を左迄利益と感ぜざるも、或は之と同様の理由に本くのではあるまいかと思ふ。學者が他の場所に居るよりも大學といふ環境の内に居ることに依りて、遂に多くの無形的所得を有し得るが如く、農家は滿洲に住むよりも、日本といふ環境の内に住むことに依りて、遂に多くの無形的所得を有し得るのであるまいか。若し然りとするならば、假ひ一般物價は日本よりも滿洲の方が低廉にして、一定の貨幣所得を以て割合に多くの食物被服を購買し得らるるとするも、此の如き所得が吾等の唯一の所得に非ざる限り、農家は必しも滿洲に住むことを以て、日本に住むよりも利益なりと爲さざる筈である。

私はまだ滿洲を視察したことが無い。併し攝待氏の言はるる所に従へば、滿洲の農村は『荒涼寂寞』であつて、そこには『不潔と無趣味とに鎖されたる陋屋』があるばかりである。然る

に日本には『瀟灑たる農村と畫の如き田園』とがあつて、日本と滿洲とでは『霄壤の差』があると云ふのである。只これだけで以て、滿洲よりも日本に住む方が、遂に多くの無形的所得を得らるることを、想像し得らるのである。

氏の説明されたる如く、日本では一般物價が高い、公租、公課、并に諸寄附の負擔も多い。併し其の代りには、其の取り立てられたる租税や寄附に依つて種々の社會的設備が整へられてある。勿論其等は猶極めて不十分なものではあるが、併し滿洲に比ぶれば、遂に進んだものである。攝待氏の言はるる如く『滿洲は未だ現日本と異り、教育、衛生、醫藥等の如き文明的設備を缺いて』居るのである。然るに日本には到る所の農村に小學校の設備がある。日本に住む限り、如何なる農民も、授業料をも支拂はずに、自分の小供を教育することが出来る。滿洲に行かば、假ひ物は廉く買へるとしても、此の如き利益を受くる望は全く無い。日本に居たならば病氣に罹つた時、醫師の診察を受け又は醫

樂を求むることが出来る。勿論それが爲には多少の金を支出せねばならぬが、生命を棄てるよりも金を棄てる方が利益である。日本に居たならば租税の外に諸種の寄附もせねばならぬ。併し村の八幡の祭禮に寄附をする代りには、祭禮の賑ひを見て樂むことが出来る。時には村芝居の催しもある。僅か數錢の金を出したならば、日本に居る限り、時折其芝居を見ることが出来る。滿洲に居たならば、四五錢の金で斯かる娛樂を得るは、恐らく夢想も出来ぬ事であらう。日本では道路が整頓して居る、警察が行き届いて居る、新聞が早く見られる。列擧し來るならば、滿洲に居るよりも、日本に居ることに依りて得らるる所の無形の所得は際限なくある。

されば、單に生活費の内容實質をのみ比較せば、日本の農民の生活は、滿洲の農民のそれに比し假ひ劣れる所ありとするも、直ちに此事實よりして、『滿農生活の日農生活に優るとも劣ることなきを斷言して憚らざる』ことは出来ぬかと思ふ。『滿洲農家の生活は其程度甚だ低く、吾

が日本農家の比にあらざる』ことは、『從來吾が滿洲旅行者、視察者の多くが唱へし所にして』、攝待氏自身の『數年前渡滿當初の感も亦同一なりき』と云ふことであるが、竊に考ふるに、數字的研究に本かざる、最初の瞥見に依つて得られたる、一種の直覺の方が、或は却て事の真相を得たものではあるまいか。姑く記して攝待氏の教を俟つ。

要するに、吾人は個人の生活狀態を比較するに當つては、貨幣所得の大小の外に、次の事項を計算に入れなければならぬのである。即ち其一是貨物の價格又は品質の變動及び相違である——時の關係に於ては變動、所の關係に於ては相違。今問題とする所に從つて、以下専ら相違の場合に就てのみ立言す。——貨幣にて見積りたる所得額には何等の相違なしとするも、物價にして相違するか、又は市場に供給せらるる財の種類又は品質が相違する時は、同一金額にて購入し得らるる財の分量又は種類の上に相違を

生ずるが故に、其事は人々の實際生活の上に、貨幣所得の相違と同じ關係を有するものである。(攝待氏は此點に就ては、物價の相違を計算に入れられたるのみ)。其二是職業以外に於ける閑暇の多少である。同一金額の貨幣所得を得

つつあるも之を得るが爲に犠牲とする時間の多少に依りて人々の生活狀態は相違すべき筈である。(此點は日滿農家の生活比較に於て問題と爲さざりしものである)。其三是職業それ自身に伴ふ貨幣所得以外の利益である。官吏となりて叙位叙勳の利益あるの類。(此點も本篇に於ては問題と爲さざりしものである)。第四は社會的境遇の改善に伴ふ貨幣所得以外の利益である。人と人との私的交際に依つて得らるる諸般

の利益、法律制度其他一般政治の改善に伴うて生ずる利益を指す。(此點は日滿農家の生活比較に於て最も重きを置くべき點である)。第五は資本主義的組織以外の組織に依つて得らるる所得である。其主なるものは、道路、公園、博物館、圖書館、病院、學校等公共的設備より生

ずる利益であつて、第四の社會的境遇といふ意味を廣義に用ふれば、その大半は、第四の中に包含されて仕舞ふ。(之も亦、日滿農家の生活比較に於て看過すべからざる事項である)。

日滿農家の生活比較は兎もあれ、吾々の生活狀態を比較するに當つては、貨幣所得以外此等の事項をも計算に入らるるの必要ある所以に就き讀者の注意を惹くことを得れば、此小篇の目的は足るのである。